

岡崎むかし館

モノを計る / 量る

竿秤 (さおばかり)



竿につけた取っ手のひもを支点とし、フックに計量するものを吊り下げ、反対側に下げた分銅を移動させ水平に保つ位置の目盛で量ります。

岡崎むかし館 蔵

五合枡 (ごごうます) こくよう 「穀用」の印有り



ご飯の量は、ひとり一日 5合が基準でした。

岡崎むかし館 蔵

台秤 (たいばかり)



このように分銅を使う方法から、パネを利用して針で重さを表示する方法に変わっていきました。現在は電子式でデジタル表示するタイプが主流です。

岡崎むかし館 蔵

私たち人間が、モノの長さや重さを「はかる」つまり計量を始めたのは、遠く一万年くらい前といわれています。おそらく、狩りや農業をするのに必要となり、知恵と工夫により考え出されたのでしょう。

ふだん何気なくのように使っている定規やはかり。これらについている目盛がバラバラだと、正しい長さや重さがわからないことになり、とても不便であるばかりか、世の中から「信頼」というものが失われてしまいます。

計量の基準を定め、正しい計量の実施を確保することは、お金の発行や流通と同じくらい、人間社会になくてはならない制度なのです。

日本では、701 大宝元 年たいほうりつりょうの大宝律 令によって、初めて計量制度が統一されたとされています。その後時代を経ていくと、基準が各地でバラバラになってしまいましたが、1582 天正 10 年に豊臣秀吉が行った、いわゆるたいこうけんち太閤検地の際に、京都の商人が使っていた枡が全国基準ますとなりました。なお計量の単位は、中国から伝わった「尺しゃく」や「貫かん」が、明治時代半ばまで使われていました。

度量衡の換算例	
長さ	<small>すん</small> 1寸 = 約 3cm 1尺 = 10寸 (約 30.3cm) 1間 = 6尺 (約 1.81m)
体積・容積	1合 = 約 0.18ℓ 1升 = 10合 (約 1.8ℓ) 1斗 = 100合 (約 18ℓ)
重さ	<small>もんめ</small> 1匁 = 3.75g 1貫 = 1,000匁 (3.75kg) <small>きん</small> 1斤 = 160匁 (600g)

参考文献：『日本民具辞典』日本民具学会 ぎょうせい、1997

『絵引民具の事典』岩井宏美ほか 河出書房新社、2008

『みんなの暮らしを支えている「計量制度」』経済産業省